３６．築城　則子氏（遊生染織工房　主宰）

**「『凛としたまち』へ。北九州の人々がもつ気質を生かし、
実直に守るべきは守り、かつ革新的なことにも挑戦していく。これが伝統となる。」**

築城　則子（ついき　のりこ）
北九州市生まれ。染織家。
早稲田大学中退後、染織研究所、久米島、信州で紬織について学ぶ。
1984 年に小倉織を、1994 年小倉縮を復元。1995 年に遊生染織工房を設立。
日本伝統工芸染織展文化庁長官賞をはじめとしたさまざまな受賞歴をもつ。

「北九州の気質と風土を体現する小倉織」

その土地の持つ風土と気質を現したものとして、伝統工芸があります。北九州の伝統工芸の一つが小倉織です。この小倉織は、織物のなかでも特異な性質を有しています。それは、経糸が多く、木綿の織物の中でも生地が丈夫でなめらか、高品質な点です。

経糸が多くなると、織が細かくなり織りづらくなるのですが、これまで小倉織が、簡易な方向に流れず、実直に守るべきものを守ってきたところに、このまちの気質が現れていると思います。決して雅な世界ではなく、まさに「質実剛健」という言葉が当てはまる。これまで引き継がれてきたこの織物には、このまちに住む人々の精神的なエッセンスが表れているのではないでしょうか。

このことは、市民性として、いつの時代も変わらずに、「器用に変わることはできないけれども、筋を通す気質がある」ことにも通じていると感じています。

「ものづくりの歴史と豊富な自然環境」

この小倉織ですが、ご存じのとおり、一度途絶えてしまいました。明確な理由はわかりませんが、繊維産業から重工業への転換が進められた中で、鉄を中心とした製造業のまちに代わっていったのではないかと考えています。

ただ、これまでを通して言えることは「ものづくり」という環境は常にあったということです。私が小倉織を始めた後も、若い方々が様々なものづくりにチャレンジしています。こういったものづくりの精神は、このまちのポテンシャルではないでしょうか。

江戸期からの 300 年間を考えてみると、小倉織を作り続けた先人たちには、生半可なことではぶれない、強い志がありました。小倉織は「粋」だと言われることが多いですが、「心意気」の「意気」という言葉にも通じているのではと感じています。

また、北九州市の持つ豊富な自然環境も大きなポテンシャルでしょう。

小倉織は緯糸が見えず、たて縞になるという、制約が多く融通の利かない織物ですが、その限られた中でもデザインとして情感を込めるべきだと常々思っています。その情感の源泉は、やはりこのまちにある自然ではないでしょうか。これほど身近に自然が豊かな大都市は他になく、作品を制作する中で、四季をどう映していくかなどを考えるとき、インスピレーションの源泉はこのまちのいたるところに溢れていると感じます。

「九州の玄関口であり、世界とつながるまち」

北九州市は九州の玄関口であり、本州から来る人々が必ず通るまちとしての自負を持っていると思います。また、北九州の人々にとって、関門海峡を通る船の往来は「日常の風景」と言えます。海がすぐそばにあるまちに住んでいると、それがあまりにも当たり前の光景になり過ぎていて、意識していないかもしれませんが、北九州の人々が持つ、このまちと世界はつながっているという、「世界への目線」は、DNA の中で、自然としみついているものなのではないかと感じています。

このような歴史や人々のもつ意識を考えると、充実した港湾整備や北九州空港の 24 時間化は当然の経過だと思いますし、今後はこれらをより生かしていけるとよいのではないでしょうか。

「『伝統』には、『守り』と『革新』が必要」

時代は変化し続けているものです。伝統工芸と聞くと古臭いというイメージもあるかもしれませんが、伝統はその時代において革新でなければいけないと思います。

なぜなら、守りばかりでは、伝統は駄目になってしまうからです。革新的なものに挑戦し、新たなものを取り入れていくことこそが、次の時代の伝統として受け入れられていくのです。

そういう意味で、これまで北九州市において新しい分野に取り組まれてきたことは素晴らしいと思います。それぞれの産業に携わる皆さまが、新しいものを取り入れつつ、今までのものも守っていくことで伝統が形づくられ、今の北九州市があるのだと思いますし、今後もそうなっていくことでしょう。

明治以降の日本で最も早く、劇的な変革を実現したのは、この北九州市だと思います。人々の移動がそこまで多くはなかった時代、官営八幡製鐵所の操業を契機に、全国各地から人が集まり、まちが発展してきました。

それまで他のまちが経験したことがないことをこのまちは先んじて経験しており、その分、スローダウンも早かったということではないでしょうか。あともう何年か経つと、どこのまちも北九州市と同じ課題を抱えるようになっているのではと思います。

先に経験しているからこその目線を、早くから示して、素晴らしいモデル都市になってもらいたいと切に願っています。

「『凛』としたまち、『良い加減』のまち」

「凛」は、潔さを含めた言葉と捉えています。このまちの行政や企業などが進む姿は、「凛」としていて、このまちで行われている、目標に向かっていく推進力は非常に大きいものがあると感じています。

また、暮らしの面では、仕事で東京や海外に行くことも多々ありますが、あまりにも大きいまちは疲れを感じやすいです。

そういう意味で、北九州市は心地よく暮らせる「良い加減」のまちと言えます。人口が 100 万人に近い大都市であるにも関わらず、自然にも恵まれ、物価も高すぎず、暮らしやすい。

そうなると、普通は何か足りないものがあることも多いのですが、空港があり、新幹線ののぞみ全便が停まる小倉駅があり、北九州市を本社とする企業に誇りを持て、本当に様々な面で利便性が高く、ほどよく暮らせるまちだと感じています。

文化人類学で言われる「中心と周辺」。中心ではなく、あえて周辺だからこその満ち足りた気持ちが似合う北九州市ではないでしょうか。